

アカデミック・ジャパニーズ(AJ)を考えるための文献案内・シラバス例

◆ アカデミック・ジャパニーズとは？

「アカデミック・ジャパニーズとは何か」という根本的な問いをめぐっては、まずはその問いを共有する共同研究メンバーによる科研中間報告書をご覧ください。

科研中間報告書（研究代表：門倉正美）『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』2003年10月刊（前半は、メンバー11名による研究論文。後半は、メンバーの既発表の論文等の資料。紀要論文等、入手しにくい論文も収録されている。）

以下では、アカデミック・ジャパニーズについて考え、実践していくための文献案内とアカデミック・ジャパニーズを意識したクラスのシラバス例を紹介する。

◆ 目次

文献案内	シラバス例
1 日本語テキスト 堀井恵子・門倉正美	1 日本語予備教育
2 AJ関連領域から 門倉正美	イーストウェスト日本語学校 嶋田和子
3 大学教養教育の観点から 大島弥生	2 大学「日本語」教育
4 英語教育におけるEAP(English for Academic Purpose)の文献 二通信子	横浜国立大学留学生センター 門倉正美
5 日本語予備教育の観点から 嶋田和子	3 大学「日本事情」教育
6 中国における日本語試験標準シラバス及び日本語教育指導要領 曹大峰	武蔵野大学文学部 堀井恵子
	4 大学「日本語表現法」
	東京海洋大学海洋科学部 大島弥生

文献案内

1 日本語テキスト

堀井恵子（H）・門倉正美（K）

- 近藤安月子・丸山千歌(2002)『日本への招待』東京大学出版会－「現代日本社会の多様化」をテーマとし、その社会を生きる人々のありようという身近なトピックを資料等によって掘り下げている。等身大の世界から社会構造に迫る探究心を触発する方法にAJが学ぶ点がある。また、「日本社会分析」という専門科目の講義内容と関連づけられているが、ことばの学習と科目学習を有機的に関連させていく試みとしても興味深い。（K）
- 山本富美子他(2001)『国境を越えて』新曜社－社会科学系の一般教養的テーマを、科目教員へのアンケート調査に基づいて精選し、学習者がそれらの現代的課題について、日本人学生と議論しうる発信力をもつことを目指したテキスト。図表の読み方、要約、レジュメ・レポート作成等のAJ基礎力養成のタスクが入念に付されている。（K）
- 佐々木薫他(2001)『トピックによる日本語総合演習／中級前期・中級後期・上級・上級用資料集』スリーエーネットワーク－勉学・研究のための日本語運用力を養成する目的で作成、学習者が自分でテーマを探して調査、考察、発表することを目標とし、そのプロセスで、情報収集、情報伝達、調査分析、原稿作成、発表などのスキルを養う。（H）

- 佐々木瑞枝他(2001)『アカデミック・ジャパニーズ』ジャパンタイムズー充実したキャンパスライフを送るために必要なコミュニケーション力を養成する。日本人の大学生が常識として知っている事柄をふまえ、自ら問題を設定して、日本語によって発表する発信型スキルの育成をめざす。(H)
- アカデミックジャパニーズ研究会(2001)『大学・大学院留学生の日本語①読解編②作文編③論文読解編④論文作成編』アルクー専門日本語の土台の部分となる論理的思考による理解・表現能力の養成を目指したもの。読解教材では、文章の論理的構造に着目した読みのスキルの習得を、また作文教材では、構成や展開パターンに即した練習で最終的には学術論文までの力がつけられる。(H)
- 佐々木瑞枝+横浜日本語研究会(2000)『日本語パワーアップ総合問題集』ジャパンタイムズーアカデミックな内容を多く取り上げながら、予測・類推力、スキミング・スキヤニング力等がプレースメントから始めて段階的に学習できるように構成されている。(H)
- 二通信子・佐藤不二子(2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワークー論理的な文章の書き方を手順を追って学ぶもの。(H)
- 鎌田修他 1998『中級から上級への日本語』ジャパンタイムズー説明・理由づけ、記述、報告な談話レベルの言語活動を理解表現できるようにしたもの。(H)
- 三浦昭・岡まゆみ(1998)『中・上級者のための速読の日本語』ジャパンタイムズー精読中心の、日本語教育における読解教育に「スキヤニング」と「スキミング」という英語教育における「速読」のスキルを全面的に取り入れ、紹介したテキストとして画期的な意味をもつ。「基本技術編」のユニークな工夫に対して、「実践編」、「挑戦編」がワンパターンになっているのが残念。(K)
- 倉八順子(1997)『日本語の表現技術 読解と作文上級』古今書院ー大学で専門を学ぶ留学生が必要とする日本語能力として、情報を読み取り要約文を書く、要約文に基づいて意見文を書く、文化の意味に気づくことにより、言語を自己に意味あるものとして学んで行くというコンセプト。(H)
- 浜田麻里他(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版ーレポートを書く上で必要な基本的知識やスキルがタスクを通じて段階的に身につくように配慮されている。留学生と日本人学生がともに学べるように作られている点は、日本人学生の日本語力育成もA Jの射程にあることを示している先例と言えよう。(K)
- 齊山弥生・沖田弓子(1996)『研究発表の方法』凡人社ー日本の大学、短大、大学院で学ぶ留学生が日本語でレポートを書いたり、口頭発表を行ったりする際に必要とされる技能を養う目的で、開発されたテキスト。手順が丁寧に紹介されているので、学習者のモデルとしてつかいやすい。(H)
- ピロッタ丸山淳他(1996)『大学の授業へのパスポート』凡人社ー日本の大学で学ぶ留学生が直面する学習場面での問題や、日本人の先生などとのインターアクション(相互交渉)の問題を解決し、自律的に学習する一助となるように作られたもの。日本の大学で学ぶためのストラテジー(学習方法)を練習を通して学べるようになっている。(H)
- 飯野清士他(1992)『キャンパス・ジャパニーズ』専門教育出版ー日本留学試験でことさらキャンパス・ジャパニーズを問わなくても、このテキストの内容程度を入学後に速習すれば十分(K)

- 産能短期大学(1990)『大学生のための日本語』凡人社一情報収集の方法、ノートのとおり方、答案の書き方、ディスカッションの仕方、ブックレポート、研究発表と、大学での学習に必要なスキルが一通りカバーされておりA Jのスキル面でのあり方を考える上で参考になる。(K)
- 産能短期大学(1988)『講義を聞く技術』産業能率短期大学出版社一アカデミック・ジャパンーズに意識的に取り組んだ草分け的なテキスト。「聞き流す」ことを教えているところが有益。(K)

2 A J 関連領域から

門倉正美

川上郁雄(1997)「日本文化を書くー「日本事情」を通じてどのような力を育成するか」『宮城教育大学紀要』第32巻, 1-16.ー「日本文化を書く」ためのプロジェクトワーク的なクラス活動を通じて、客観的分析力、論理的思考力・記述力の養成をめざす実践報告。アカデミックな日本語力育成のための、さまざまな仕掛けが大いに参考になる。

齋藤ひろみ(2001)「「学習」を支える日本語能力の育成に向けて」『世界を開く教育』第23巻, 60-77ー生活言語能力」とは違った「学習言語能力」のあり方の分析とシラバス化、日本語学習と教科学習をどう統合していくかといった点において、年少者日本語教育におけるJ S LカリキュラムとA Jは切り結ぶところが多い。

文部科学省初等中等教育局国際教育課(2003)『学校教育におけるJ S Lカリキュラムの開発について(最終報告)』一年少者日本語教育のJ S Lカリキュラムの現在の実践研究成果が集大成されている報告書。特に、すべての教科に通じる「体験→探究→発信」という学習活動力育成を目指した「トピック型」カリキュラムは、A Jにとって刺激的である。

工藤順一(1999)『国語のできる子どもを育てる』講談社現代新書ー独自の塾での子どもへの教育実践を踏まえて、「書くこと」「読むこと」「読解問題のあり方」を鋭く考察している。4コママンガ「コボちゃん」のストーリーを作文させるタスクは興味深い。同じ著者による『論理に強い子どもを育てる』講談社現代新書もすすめる。

早稲田大学日本語研究教育センター「総合」研究会編(2003)『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センターー細川英雄が唱え、理論的探究と実践を積み重ねている「日本語総合」クラスの実践例が細川他7名によって展開されており、A Jの観点からも摂取できるヒントが数多く見られる。

中村敦雄(1998)『コミュニケーション意識を育てる発信する国語教室』明治図書ー「発信する力」をどのように育成するをテーマとして、高校国語教育でのクラス実践と理論的な考察が豊富に提供されている。近年の国語教育の活性状況からは学ぶべき点が多い。

言語技術の会編(1990)『実践・言語技術入門ー上手に書くコツ・話すコツ』朝日選書ー「ことばによって、事実や状況を正確に伝える、自分の意見や意図を、筋道を立てて他人に伝える、的確に要旨を述べて、能率よく話を進める」ための「言語技術」演習の古典的本。

木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書ー「事実」と「意見」の区別、パラグラフ・ライティングというA Jの基本を押さえておくためには、この古典的著作は不可欠だろう。

野田尚史・森口稔(2003)『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房ー「お知らせのメール」「レストランのメニュー」「マニュアル」等、日常目にする書き物の分かりにくい例を批判させることを通して、「では、自分ならどう書くか」を考えさせるトレーニング本。模範解

答がないのがよい。日本人向けのようだが、留学生も十分楽しんで学習できる。同じ著者たちによる『日本語を話すトレーニング』も同趣旨の使い勝手のよいテキストである。

青木三郎(2002)『ことばのエクササイズ』ひつじ書房—ことばをめぐる諸問題について、学習者の関心をそそり自ら考えさせるためのエクササイズが工夫されている。イメージのリテラシーを問うものと、CMのコピーの意味合いを考えさせるものが、とりわけ面白い。

野矢茂樹(1997)『論理トレーニング』産業図書—教養教育「論理学」のテキストだが、文章読解や議論を論理的にすすめていくための基礎修練をたっぷり課している点はA Jとしても見習いたい。「批判」の基礎作業として「質問」をすすめている点は齋藤孝と通じる。

齋藤孝(2003)『質問力』筑摩書房—次々と、よく売れる本を量産しているので、軽く見られがちだが、「質問力」の大切さを説いた、この本の趣旨はA Jとしても摂取したいところである。齋藤氏の本には、『読書力』(岩波新書、2002)の速読のすすめや、『日本語ドリル』(宝島社、2003)の図をことばで説明する訓練等、参考になる指摘が多い。

荻谷剛彦(2002)『知的複眼思考法』講談社+α文庫—「自分の頭で考える」ために「批判的に読み・議論する」力を養う訓練を段階的に示している。これからの大学教養教育の核心が「知的複眼思考法」として提起されている、と言えよう。

赤堀侃司編(1997)『ケースブック大学授業の方法』有斐閣選書—大学の教育方法についても近年は、さまざまな改革の努力が試みられるようになっている。「メディアの活用」「学習活動」「資料」「課題」「コミュニケーション」等における改善努力が収録されている。

学習技術研究会編著(2002)『知へのステップ』くろしお出版—英語圏における「スタディ・スキルズ」を大学全体として導入した成果を公刊したもの。「大学で学ぶ」ための基本的力を分析し、それらを段階的に育成するプランを提示している。

小笠原喜康(2002)『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書—大学におけるレポートや論文作成指導の豊富な実践をもとに、「書き方の約束」から始めて「自分の考え方探し」まで導く。続編『同・インターネット完全活用編』も参考になる。

オンタリオ州教育省編(1992)『メディア・リテラシー—マスメディアを読み解く』リベルタ出版—メディア・リテラシー教育における古典的な本だが、A Jにおけるタスクの多用なあり方をいかに工夫するかのモデルが満載されている。

道田泰司・宮元博章(1999)『クリティカル進化論』北大路書房—4コママンガ「OL進化論」を素材にしてクリティカル・シンキングの基本を明快に提示していく。クリティカル・シンキングについてもっと深く知ろうとするには、著者たちが訳した『クリティカル・シンキング入門編・実践編』北大路書房の記述が懇切丁寧である。

久恒啓一(2002)『図で考える人は仕事ができる』日本経済新聞社—「図解学」を世にアピールした本。図で示すことは、会社での「仕事」だけでなく、読解や議論、問題設定、プレゼンテーションといったA J領域のスキル開発にも通じる。図解の具体的な方法を説明した『同書・実践編』と『図で考える人の図解表現の技術』も参考になる。

『高校「現代社会」資料集』一橋書房／三省堂—高校の「現代社会」科目は現代市民社会を生きるうえでの基本的教養の全体像をスケッチしている。教科書は書き方が限定されているが、上記2出版社からの『資料集』は、現場の先生方の問題設定と生徒たちに考えさせたいという意気込みが伝わってくる力作。入手しにくいのが残念だ。

3 大学教養教育の観点から

大島弥生

- 石塚修(2001)「医師に患者とのコミュニケーションを理解させるための「国語」教育」『読書科学』45-4, 135-141. -医学専攻の1年生に「患者と信頼関係を築くにはどうしたらいいか」というレポート等の活動を課し, 医師に求められる言語能力を考えさせる。
- 井上尚美(1989)『言語論理教育入門—国語科における思考』明治図書出版—「言語論理教育」を提唱し, トウルミンのモデル「論証の型」を議論の全体構成に広げるというアイデアを詳しく展開している。
- 井下千以子(2002)「考えるプロセスを支援する文章表現指導法の提案」『大学教育学会誌』24-2. -学習者が考えることを目的とする文章表現授業の提案。
- 井下千以子(2002)『高等教育における文章表現教育に関する研究—大学教養教育と看護基礎教育に向けて—』風間書房. -日本の高等教育における文章表現教育の状況, 理論的背景, 関連研究, 検証, プログラム提案を扱った包括的研究である。文章表現教育を「表現力や思考力を高めるための教育」として高等教育機関に位置づけることを提起している。
- 入部明子(1996)『アメリカの表現教育とコンピュータ』冬至書房. -プロセスを重視する作文教育にコンピュータが占める重要性を指摘している。
- 入部明子(2002)「書くこと(作文)の教育について—比較教育学的研究の成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書出版 201-209. -各国の作文教育研究の現状を紹介。大学での文章表現教育にとっても参考になる。
- 入部明子(2002)『論理的文章学習帳—コンピュータを活用した論理的な文章の書き方』牧野出版—ソフトウェアの機能を活用しつつ思考マップ, 構想マップ, 構成, アウトライン, 読み手からのコメント, 推敲, 編集, 刊行を進めるプロセスを具体的に示している。
- 大西道雄(2002)「新しいレトリック理論・文体論・文章心理学・文章論と関わらせた書くこと(作文)の研究の成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』明治図書出版 210-216. -国語教育の中での新しいレトリック理論と関連した近年の動向を詳述。
- 向後千春(2002)「言語表現科目の9年間の実践とその再設計」『大学教育学会誌』24-2, 98-103. -富山大学での実践の分析を通じ, 大学での言語表現系の科目の設計に関して中核部分の共通化が問題であるとし, 言語表現科目の設計について提案を行っている。
- 筒井洋一(1998)「大学生の表現能力をどのように学問へと導くのか—日本語表現法科目の全国的広がりとその課題」『げんごひょうげん 言語表現部会1997年度報告書』No. 5, 富山大学表現部会—大学での日本語表現科目の広がりと実際について論じている。
- 「大学生に日本語を教える授業が広がっている」: 筒井洋一 ウェブサイト <http://www.kyoto-seika.ac.jp/tsutsui/thesis/hyogen/hyogen.html>—京都精華大学筒井氏のサイト。大学における日本語表現科目の現状と課題について広範に論じている。
- 豊澤弘伸(2002)「大学・短大における「国語」教育」『月刊国語教育研究』358. -「大学・短大での国語教育を分類し, リテラシーの獲得を通じ専門教育へ向けての基礎力の充実を図る実践を報告している。
- 日本語技法の広場(高知大学) <http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/~yoshikur/gihou.html>—高知大学の「日本語技法」科目のホームページ。大学生向けの文章表現教材が網羅的に紹介されており, 非常に参考になる。リンクなど参考情報も豊富。

三宅和子(2002)「『日本語能力を育てる』とは ―大学生の日本語能力をめぐる問題と教育の方向性―」『文学論藻』76(東洋大学文学部紀要第55集), 18-32. ―学習者のレポートに現れた表現能力の問題点を, 言語技術的側面, 思考的側面, 認知的側面にわけて論じている。

吉倉紳一(1999)「全学必修科目「日本語技法」の新設とそのマニュアル作成の経験」『大学教育学会誌』21-2. ―高知大学における様々な分野の教師による「日本語技法」のコースの実践を紹介している。

4 英語教育におけるEAP (English for Academic Purpose)の文献 二通信子

◇ EAP全般に関する文献

(東京大学留学生センター)

Flowerdew, J. & Peacock, M. (ed.) (2001). *Research perspectives on English for academic purposes*. Cambridge: Cambridge University Press ―EAP(English for Academic Purpose)についての理論や教育内容に関する25編の研究を収める。

Jordan, M. K. (1997). *English for academic purposes*. Cambridge: Cambridge University Press―英語教師のためのEAPの解説書。スタディ・スキルズ、コースデザイン、指導方法、教材など、学習スタイル、genre分析など全般的に取り上げられている。

◇ アカデミック・カルチャーやアカデミック・ディスコースに関する文献

Canagarajan, A. S. (2002). *Critical academic writing and multilingual students*. USA: the University of Michigan Press―現在の「英語帝国主義」的な風潮を批判し、英語のアカデミック・カルチャーにおける非英語話者の置かれている状況について論じる。

Flowerdew, J. (ed.) *Academic discourse*. London: Longman―英語のアカデミックな文章に関する研究(専門分野による文章の違い、コーパスによる分析、言語による文章の比較研究、第2言語話者を対象とした習得研究)など、16編の論文を収めている。

Flowerdew, J. & Miller, L. (2003) On the nation of culture in L2 lectures. *TESOL Quarterly*, 25 (1), 123-142―香港のある大学での英語話者の教員による中国人学習者への講義を、ethnic culture, local culture, academic culture, disciplinary cultureの四つの観点から分析する。学習スタイルについても言及。

Johns, A. M. (1997). *Text, role, and Context: Developing academic literacies*. Cambridge: Cambridge University Press.―アカデミックな世界で求められる文章の特徴、ライティングの教師の役割(専門分野との橋渡し)などについて論じる。

Li, Xiao Ming. (1996). "Good writing" in cross-cultural context. NY: State University of New York Press. ―中国人英語学習者の作文に対する、英語母語話者と中国語母語話者のそれぞれの教師グループの評価を比較し、作文評価における文化の違いを論じたもの

◇ アカデミック・ライティングの指導に関する文献

Coffin, C., and Others. (2003). *Teaching academic writing –A toolkit for higher education*. London: Routledge―プロセス・アプローチの考え方に基づく大学におけるアカデミック・ライティングの実践を具体的に示す。インターネットによる指導にも言及。

- Fairbairn, G. J. & Winch, C. (1996). *Reading, writing and reasoning A guide for students*. Buckingham: Open University Press—大学での学習に必要なリーディング及びライティングのスキルやストラテジーをどのように養成するか、学生のためのガイド。
- Howard, R. M. (1995). Plagiarisms, authorships, and the academic death penalty. *College English*. 57 (7), 788-806.—学生のレポートにおける剽窃の問題を取り上げ、外部の資料の利用法など、学生の現状を踏まえたライティングの指導を提言する。
- Jordan, M. K. & Plakans, M. (2003). *Reading and writing*. University of Michigan Press—Content-based Approach の考え方に基づくアカデミック・リーディング及びアカデミック・ライティング、クリティカル・シンキングなどを総合的に学習するための教科書
- Leki, I. (1998) *Academic writing. (second edition)* Cambridge: Cambridge University press.—アカデミック・ライティングの教科書。ライティングのプロセスおよびスキルを学習するとともに、分析、評価などの知的活動能力を高めることを目指す。
- Pally, M. (1997). Critical thinking in ESL: An argument for sustained content. *Journal of second language writing*, 6 (3), 293-311.—第2言語としての英語教育、特に成人の学習者を対象とした critical thinking の教育についてのこれまでの議論の検討と実践例の紹介。
- Pennycook, A. (1996) Borrowing other's words: Text, ownership, memory, and plagiarism. *TESOL Quarterly*, 30 (2). 201-230.—英語学習者のレポートにおける剽窃の問題を、西欧における著作権の考え方の変遷、西欧文化と儒教文化における知の継承方法の違い、学習者のおかれている状況などの面から考察する。
- ◇ アカデミック・リーディングの指導に関する文献
- Carrell, P. L., Devine, J., & Eskey, D. E. (1998). *Interactive approaches to secondlanguage reading*. Cambridge: Cambridge University Press.—主体的な読み手を育てるための指導。
- Upton A. T. (2004) *Reading skills for success: A guide to academic texts*. The University of Michigan Press.—大学での学習に必要な読解のスキルやその他のスタディ・スキルの指導について、豊富な実例と共に論じる。
- Wallace, C. (2003). *Critical reading on language education*. London: Palgrave Macmillan—第2言語としての英語教育での教室での *Critical reading* (批判的な読み) の理論と実践について解説する。テキストを社会的な文脈の中で批判的に読む事例を紹介する。

5 日本語予備教育の観点から

嶋田和子

日本語教育振興協会は、日本語予備教育に関して「基礎日本語教育研究」(1999～2000年度)、「教材開発」(2001～2003年度)を行い、以下の報告書を刊行している。

- 1999年度基礎日本語教育研究プロジェクト(2000)『日本語学校生(就・留学生)のための基礎日本語プロジェクト結果報告書』日本語教育振興協会—活動場面から大学でどのような日本語能力が求められるかを分析し、技能・知識の抽出を行った。抽出された23項目をもとに、二つの概念図を提示した。

- 2000年度基礎日本語教育研究プロジェクト(2001)『運用能力獲得のための基礎日本語教育—進学希望者を対象として—』日本語教育振興協会—大学進学後に求められる日本語能力を5つの領域に分類し明示した。さらに課題達成能力の育成をめざした教室活動に関する研究を行い、サンプル例を提示した。
- 2001年度日本留学試験の実施に対応した教材開発プロジェクト(2002)『課題達成能力の育成を目指した教室活動への提案』日本語教育振興協会—2年間にわたる理論的研究を基礎に、「日本留学試験」に対応した教室活動のための教材開発を行った。
- 2002年度日本留学試験の実施に対応した教材開発プロジェクト(2003)『課題達成能力の育成を目指した教室活動の実践』日本語教育振興協会—前年度の研究を受け、教材テキストの充実、評価シートの作成、語彙表の作成の3点を研究目標とした。
- 2003年度日本留学試験の実施に対応した教材開発プロジェクト(2004)『日本留学試験を目指した語彙と例文集の作成』—日本留学試験関連語彙表の充実を図った。さらに語彙表をもとに文脈の中での語彙学習をめざした「学習者のための例文集」を作成した。

6 中国における日本語標準試験シラバス及び日本語教育指導要領 曹大峰

(北京外国語大学)

- ▽ 教育部編(2004)『全国碩士研究生入学考試日語大綱(非日語專業・第6版)』高等教育出版社—大学院非日本語専攻(修士課程)入学試験シラバス。評価目標・試験形式と内容・問題構成のほかに、語彙表・文法項目・基本表現・慣用句・模擬問題・録音テープ付。
- ▽ 大学日語四級考試設計組編(2003)『大学日語四級考試大綱』高等教育出版社—大学非専攻日本語学習者を対象とする標準試験シラバス。大学日語教学大綱(第二版)に基づいて総合運用能力を測定目標に新しく改訂された新版(模擬問題・評価基準・CDなど付)。一段上の六級試験も準備中。
- ▽ 高校日語專業四級考試大綱制定小組編(2002)『高校日語專業四級考試大綱』上海外語教育出版社—大学専攻初中級日本語学習者を対象とする標準試験シラバス。高等院校日語專業基礎段階教学大綱(修訂版)に基づいて、基礎的知識と技能、総合的運用能力を測定目標に制定された。模擬問題・評価基準など付。
- ▽ 高校日語專業八級考試大綱制定小組編(2002)『高校日語專業八級考試大綱』上海外語教育出版社—大学専攻中上級日本語学習者を対象とする標準試験シラバス。高等院校日語專業高年級段階教学大綱に基づいて、総合的言語技能とコミュニケーション能力を測定目標に制定された。模擬問題・評価基準など付。
- ▽ 教育部高等学校外語專業教学指導委員會日語組編(2001)『高等院校日語專業基礎段階教学大綱(修訂版)』大連理工大学出版社—大学専攻初中級日本語教育のガイドライン、教育対象は大学日本語専攻1~2年生。音声・文字・語彙・文法・基礎文型・表現(機能)などのシラバス付。初版(1990)より養成目標に「社会文化理解能力」や「異文化コミュニケーション能力」が明記、各種シラバスをより科学的・規範的・実用的に改訂。
- ▽ 教育部高等学校外語專業教学指導委員會日語組編(2000)『高等院校日語專業高年級段階教学大綱』大連理工大学出版社—大学専攻中上級日本語教育のガイドライン、教育対象は大学日本語専攻3~4年生。主要内容は総綱・科目・卒業論文と実習・測定と評価など。語彙・文法的機能語などのシラバス付。

- ▽ 大学日語教学大綱修訂組編(2000)『大学日語教学大綱(第二版)』高等教育出版社—大学非専攻日本語教育のガイドライン。教育対象は大学非専攻第1外国語として学ぶ日本語学習者。語彙・文法・表現(機能)・技能などのシラバス付。初版(1990)より語彙シラバスを全面的に改訂。
- ▽ 教育部考試中心編(1998)『全国外語水平考試(WSK)日本語水平考試(NNS)大綱(第三版)』—非日本語専門家の日本語水準測定試験シラバス。国費派遣訪日研究者選抜試験として毎年実施。

「アカデミック・ジャパニーズ」クラスのシラバス例

1. 日本語予備教育におけるシラバス

イーストウェスト日本語学校 嶋田和子

	読む力	聞く力	書く力	話す力	技能の統合例
上級	<ul style="list-style-type: none"> ■ 資料文献等を精読し、内容を正確に掴む。 ■ 必要な情報を素早く読み取る ■ 行間を読み取る 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 表現・内容の複雑な文を聞き取る ■ 不意の情報を正確に聞き取る ■ 社会文化的な含みを聞き取る 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 適当な量・構成のレポートを書く ■ 論拠を挙げて意見を書く ■ 資料を見ながら、自分の意見をまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 調べたテーマを発表する ■ 論理的に意見を述べる ■ 場に応じて適切に相手に伝える ■ 的確に質問をする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 資料に基づきレポートをまとめ、それを発表する ■ 授業を聞きながらノートを取る ■ 記事等を読み意見を書く
中級	<ul style="list-style-type: none"> ■ ある程度の量を速読し、内容をつかむ ■ 文章の構成を意識する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 要点を聞き取る ■ 情報を聞き取り、要不要を判断する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 要点を書く ■ 構成を考える ■ 書き言葉と話し言葉を意識する 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 説得力のあるスピーチをする ■ 場・相手に応じて話す 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 話を聞きながらメモを取り、適切な質問をする ■ 不確かな情報を確認する
初級	<ul style="list-style-type: none"> ■ 明確な内部構造がある文を読み要旨を掴む 	<ul style="list-style-type: none"> ■ キーワードを確実に聞き取る 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 分かりやすい文を書く ■ 意見とその理由を述べる 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 自分の考えを伝える ■ 必要な情報を正確に伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 情報を聞いて、メモを取る ■ 質問に正確に答える

2. 大学「日本語」教育

横浜国立大学留学生センター 門倉正美

- 講義を聞く練習 1. 聞き取りのストラテジー——『講義を聞く技術』第1章使用、2. 教師自身によるミニ講義（20分ほど・2テーマ）を聞いて、ノートをとる練習。一回目は、素材となる文章とほぼ同じ内容の講義をし、講義後、文章を速読。自らのノートを、修正したことが分かるようにして修正させて提出。ポイントを添削して返却。二回目は、文章素材を速読した後に、その素材を敷衍する形でミニ講義。ノート・テーキングの要点を指導。
- 速読練習 3回目くらいから毎回行う。1000字くらいのものから始めて、3000字くらいまでを、B4判にコピーしたものを読み、重要な個所に傍線をひき、キーワードを丸で囲む。それらをもとに要点を箇条書きしてくるのが宿題。次回に要点をクラスで確認。
- クリティカル・シンキングの考え方を導入をした後、『クリティカル進化論』の4コママンガを素材として、ペアワークでマンガのストーリーと、その論理的教訓について考える。ペアの発表をもとにクラスで考えた後、本文説明を速読する。
- 『日本語で書くトレーニング』と『日本語で話すトレーニング』を素材として、ペアワーク、グループワークで、素材の問題点を話し合ったあと、それらの問題点を「図解」的に整理する。その整理図をもとに、改良作品を宿題として提出させる。提出作品について、相互批評をする。（上記の使用テキストについては、「文献案内」で紹介している。）

3. 大学「日本事情」教育

武蔵野大学 堀井恵子

わらい：問題発見解決を中心にスキルも養う：異学部・異学年の留学生・日本人学生の共習による文化・ことば・コミュニケーションの総合学習：多方向的参加型学習

いかに問題を発見するか、いかに問題を考えていくか、いかに批判的に物事を捉えていくか、いかにそれを伝えていくかのトレーニング

第1段階：タスクシート作業：教員からVTRと資料リソース提示（**問題発見のヒント**）→タスクシート（テーマについての基礎的知識獲得、テーマについて考えたことを記入）を埋めていく（**考える**）→グループ内でタスクシートを確かめあう、テーマについて話し合う（進行役）（**インターアクション・コメント**）→グループのまとめ発表→個人ベースでのそのテーマについてのまとめ提出（出席票代わり）（**結論**）
テーマ：大学生活、日本語はあいまいか、日本語ジェンダー、少子化、グローバル化など

第2段階：グループ発表：グループでテーマを決める（**問題発見**）⇒それについて調べ、**考える**⇒他へ伝え（発表力）、そこでのフィードバック、コメント用紙に書かれたこと（**インターアクション**）などからさらに**考える**⇒個人ベースでテーマについてのまとめレポート提出（**結論**）

留学生共同作業をする体験の中で、クラスの人にわかってもらえるように伝える力をつける。日本語面で分らないとき隣の日本人にすぐ助けてもらえる：「生」日本語摂取

日本人学生—留学生にわかりやすく伝える体験・「生」日本語学習者である留学生からの質問によって、多くの発見をし、認識する。

第3段階：大討論会：タスク、グループ発表の中のテーマからさらに深めたいものをいくつかを選んで、グループディスカッション⇒進行役、発表役を決め、グループでの結論発表

4. 大学「日本語表現法」

東京海洋大学海洋科学部 大島弥生

- ・学部1年生前期の必修授業「日本語表現法」(旧称「大学生のための表現法」)
- ・約300名余の履修者を9クラス(各30-40名程度)に分け、言語担当教師(日本語教育・国語教育出身者)5名(各クラス1名)＋学生の所属学科の専門科目教師10名(各クラス1-2名)によるティーム・ティーチングで約15週の授業を行う
- ・すべてのクラスは、自主作成の統一教材(全86頁＋ワークシート16枚)を使用している。
- ・全員が「海・食・環境」関連の論証型レポートを作成し、5分間スピーチを行う。

特徴的な「しかけ」

①自己(書き手)の視点と他者(読み手)の視点を意識させる・・・自己推敲、協働推敲等

②自己の文章と文章を書く過程に対する内省、メタ認知を促す・・・振り返り欄記入等

③多数の学生に、自分自身で問題を発見し、主張を構築する過程を体験させる

・・・作業時間を長くし課題(ワークシート)提出で進む、題目を疑問文で作らせる、等

④「専門での学習の入り口となる言語表現能力」としての動機づけ

・・・専門教官から毎回の学習内容が専門でのどのような文章・発表とつながるのかを伝える、専門関連のテーマについて各自が問題を整理して作成過程を説明する、等

これらの「しかけ」に沿って上述の課題レポートに各自が取り組むことにより、学生は自らが選んだ「海・食・環境」関連の何らかのトピックについて、情報収集・問題発見・問いの絞込み・構想と構成・文章作成・読み手の視点を意識しての推敲・話し手としての発信の全過程を体験し、専門と言語の双方の教官および他の履修者からのコメントを受けることができる。また、同時に他の履修者の書いたレポートの読み手やスピーチの聞き手として、真剣に他者の発信を受け止め、コメントを返すこともほぼ毎回要求される。